明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

あんげろす

在宅での末期ケアのあり方について学ぶ機会が与えられ、その研究の為に、この夏、スェーデン、デンマークにおける実践について学ぶ為に小さな旅をした。

ホスピス病棟でのチーム・ケア、在宅での末期ケア、それを支えるスェーデン、デンマークでのさまざまな在宅ケアシステムが地方自治体単位で実践されていた。

特にスェーデンにおける地方都市でのエーデル改革以後の変化はその前に進められているイギリスでのコミュニティ・ケア改革法と対比しながら考えるべき課題が山積みしていた。

ところで、死を目前にしてホスピス病棟で毎日毎日をかけがえのない一日として過ごす病棟での一人一人の姿は、余りにも「静か」であった。静かに、まるで時間がとまっているのかと思うように淡々と過ぎているかに見えた。花に水を細い手で注いでいる人、静かに祈りを捧げている人に手を重ねて、共に祈っている姿は余りにも静かであった。

病棟内でスタッフとの会合を持たせて頂いた時、この「静かさ」について討議することとなったのである。

どんなに医学・福祉が進んでも、「祈る」こと、「癒される」こととそして「深く沈む死への準備」への支援がその中に含まれ、中核にすえられていることの大切さを学ぶ機会であった。

山崎　美貴子

第８号
１９９４．９